

2015
秀作

第48回「おかねの作文」コンクール



未来の私への投資

大分県・大分中学校 3年 河野 悠花

「おかね」ときいて私は貯金をすることしか思いうかばなかった。今はおこづかいの範囲内でやりくりできているし、そもそもそんなに欲しいものがない。毎月必ず買うものといえば500円の雑誌だけだ。

だから私は貯金をしている。

貯金を始めた理由の一つに両親の影響がある。両親は私が物心つく前から私一人の口座をつくってくれていた。小さなときにももらったお年玉は全てその口座に入れられている。小さなときにももらったお年玉の記憶なんてないけれど通帳をみるとそれが全てわかる。お年玉は小さい子にとっては唯一の収入だ。それが目に見えてわかるというのは自分のすごしてきた年や時間が実感できるということだ。そんな経験をさせてくれた両親には感謝している。

また、お年玉をもらったら貯金するという習慣が小さいときから貯金してきたことをついたことも感謝している。お年玉をもらおうと1つ買うものを決めてそれ以外はすべて貯金をするようにしている。金額で決めるのではなく必要な分だけ使うのだ。このくらいは貯金したいからこのくらいまでのものが買えるな、というように自分で貯金する額と自由に使う額を考えるようになるのだ。もらったものを全て考えなしに使ってしまうのではなくその後のことを想像して使うという力を身につけることができた。

しかし、貯金をすることの最も大きな目的は自分の成長を実感することやしっかり考えてお金を使う力をつけることではない。お金を貯めて未来の自分へとおくことだ。今はそんなに必要ではないお金を将来自分が使わなければならないときまでとおくのだ。それは今の自分から未来の自分への投資だと言えると思う。未来の自分のために今の自分がお金を貯めているのだ。まだ見えない未来の自分が使ってくれるときがきっとくるだろう、と思って貯金をすると貯金もステキなものに思えてくる。

毎年、年末年始、お年玉をもらう時期になると私は両親と貯金のお話をします。私はお年玉などで貯金をして将来、一人暮らしをするときの費用に充てたいと思っている、ということを両親に話す。両親は賛成してくれて私の将来の話になるのだ。

ある年、父が自分も小学校に通っているときくらいから貯金をしていたと話してくれた。私はてっきり一人暮らしの費用に充てたのだと思っていた。しかし、そうではなかった。母の奨学金の返済にすべてを充てたのだ。小学生のときから貯めていたお金をすべてだ。そのことに私はとてもおどろいた。しかし、母が父にとってそれだけの価値があったということなのだろう。小学生の父が未来の父のために投資したお金。それが大学生の父から母へまた投資されたのだ。私はその話をきいて、将来の自分のために貯金をするのがもっと楽しく思えてきた。たとえそのお金を直接自分に使わなくても未来の自分は幸せになっているはずだ。

また、そう考えると私は両親にも投資されているということになる。私が大きくなって幸せになるためにたくさんのお金を払って育ててくれている。私は私立の中学校に通っている。公立の中学校に通ってればかからなかったお金を払ってくれている。それは私の夢が^{かな}叶う大学に入学するためだ。そして、その大学で夢を叶えるための勉強を一生懸命するためだ。その大学を出て夢を叶えるためだ。未来の私のために両親は投資してくれているのだ。

私が貯金することは未来の私への投資だ。両親が私を育ててくれることも未来の私への投資だ。このように未来の私は今の自分を含めたくさんの人に幸せを願われて、信じられて投資されている。だから、その人たちの期待に応えることができるように、今から勉強をがんばって夢を叶えたいと思う。

